雜報

●白鳥座第三新星

去る八月二十二日の夜十時、東京の神田理學士が流星觀測中、白鳥座に二等半ぐらゐの一新星を發見した。ところが星が大きいので、かの一九〇一年のペルセウス座新星や一九一八年の鷲座新星の時の如く、やはり世界中のあちらこちらで色んな人が別々に發見してゐるらしい。今日までに知れてゐる限りでは英國プリストル市のデニング(F. Denning有名な流星觀測者)氏が同月二十日に見たといふのが最も早い、其の時の光度は三等半と報じてゐる。しかし寫眞の記錄には尙其の以前のがある。米國ハーヴードでは同月十九日の寫眞に四・八等星と出てゐるし、又スエーデン國のニルス・タム氏は更に其以前の十六日に七等星として撮影してゐる。此等の樣子から見ると此の新星は光力の增大した速さが今までの新星に比べて珍らしく緩慢であつた。

京都での觀測によると此星は八月二十四日に最大光輝として約一・七等に達し其れから急に下降し始めた。下降の速度は又珍らしく速い、既に同月末日には四等となり九月二十日には早くも六等級を過ぎて肉眼には見ゑなくなつた。十月十五日頃からは下降が幾分か緩になつて來た。十一月十日過ぎには九等以下に落ちたが、十六日頃から又少し光輝が上昇して來て、現今(十一月二十五日)は八等半ぐらゐである。(英文欄參照)

●オリオン大星雲の距離

此頃日沒後東天に上つて來るオリオン座の大星雲は肉眼でも見ゑるので有名であるが、望遠鏡で見ると此の星雲中にはイ星やテ星を始め多くの靑星が輝いてゐる。加之、近頃の寫眞望遠鏡の示す所によれば此の星雲は眼で見ゑる範圍より遙かに遠距離まで擴がつてゐて、直徑が十五度にも及ぶ。先頃ヰリアム・ピケリング氏の研究によれば、此の大星雲中に含まれる星は大低吾が太陽の百倍ぐらゐの光力を持つてゐるもので、距離は六千五百光年だといふ。望遠鏡で見ると此の星雲の中央部には四重星(Trapezium)があつて其の內最も遠く離れた間隔は吾が太陽から海王星に至る距離の二千倍で、光は八ケ月もかゝることになる。

●學術研究會の天文部

今回制定せられた學術研究會員中で天文學は定員八名左の諸氏である

寺尾　壽氏　　平山　信氏　　木村　榮氏
新城新藏氏　　平山清次氏　　大谷亮吉氏
中野德郎氏　　早乙女淸房氏

新刊紹介

理學博士　一戸直藏氏著

通俗講義天文學　下卷

一戸直藏氏の右記の書の上卷を購讀した人々は必ずや同著の通俗平易で併も系統的に細大洩らさず編輯しあるに感じ早く下卷の刊行の切望したであらう。然るに上卷出版後七年後にやつと讀者年來の宿望を滿たすべく下の卷は世の中に生れ出た。隨分待ち遠しかつた事だ。手に入るや否や早速繙くに全體が第三編にして有り章を別つ事七、恒星の概論、變光星、重星及連星、星群及星團、星雲、太陽の運動、二星流とし別に細目を掲げてある。全餘三〇六頁、挿圖六十五個、變光星の光度曲線、星雲は各二〇個を占めて居る。是を一讀するに星座名を列記せる個所に其の主格と共に物主格を並記せるは非常に便利であつて羅甸語を知らない讀者は大助りだ。其れから近頃用ひ出された銀經、銀緯を運用するに付其の銀河の極の赤經、赤緯を知りたい必要に迫られる事があるが其れに就いても詳記してある。併し銀經零度を規定しないのは物足らない。又スペクトルの部でハーヴアード分類法を收容したのは最も一般人の利とする所で現今迄の邦文書には大方洩れて居る。博士は變光星の研究家である丈其の部分は特に詳細丁嚀に記載されてあるのは同じ變光星觀測に時間と努力を惜まない余の最も感謝する所である。併し慾を言へば新星の表は一九一二年迄で切り上げ其れ以後今年迄出現した一〇個がなくて淋しい。又螺狀星雲は我が銀河系以外の宇宙であるとの說が高まつて來たが其れに就いての說述も無い樣に思ふ。併し恒星界の概念を得るには此の上も無い適當な書であると斷言するを憚らない。(東京市京橋區桶町大鐙閣發行、定價金參圓五拾錢)—古川。